信濃毎日新聞　昭和37年（1962年）6月24日（日曜日）

記者のノートから

まだ去らぬ不安

〝寝耳に水〟の焼岳の噴火

30年ぶりの中噴火

◇…北アルプス焼岳（二、四五八㍍）が十七日夜三十年ぶりに噴火した。焼岳にちかい大正池旅館の話だと、午後十時ごろ地軸をゆるがす鳴動とともに噴火をはじめ、原子雲のようなキノコ型の噴煙が、五百㍍も上空に達したという。肩の小屋付近の標高約二千百㍍の地点に、長さ約一㌔にわたって裂めがはいり、さかんに噴煙をはき続ける割れ目噴火だった。さいわいガス爆発で溶岩の噴出もなく、規模も中ていどだったため火山弾が五百㍍ほど飛んだだけ。肩の小屋にいた管理人ふたりがケガをしたほかは大きな被害はなかった。しかし、爆発と同時に大量の火山灰が降りそそいだ上高地は、一時は視界をまったくうばわれ、不安と緊張につつまれた。大正池ふきんの旅館、東京電力取り入れ口社宅の人たち約十人は着のみ着のままで約三㌔はなれた小梨平に避難したが、どこまで逃げても続く降灰とイオウのにおいに女性などは泣きだすさわぎ。また小梨平、中ノ瀬には観光客約二百人がいたが、逃げる場所もなく「一時はもうダメだと観念した」という人もあったほどだ。

管理人ふたり救出

◇…噴火したとき焼岳肩の小屋には[redacted]さん（㌶）[redacted]、[redacted]さん（㌶）[redacted]のふたりが管理のためはいっていたが、すぐ捜索隊を出した焼岳とりょう線つづきの西穂山荘、村上守さん（㌶）らの適切な処置で、約四時間後に[redacted]さんが救出された。[redacted]さんは、カンヅメのはいった箱をかぶって火山弾をのがれたと、恐怖の一瞬を語っていたが、この救出は不安におののく、上高地の人たちに、明るさをもたらした。しかし[redacted]さんは、その後地元消防団らが、まださかんに鳴動をつづけ白煙をふきあげる焼岳に決死の捜索をおこなったが、十八日正午をすぎても消息は知れなかった。人間の頭ほどもある火山弾がちらばり、生木は折られ、イオウのにおいのたちこめる現場のようすがようやく絶望視されかかったとき、県警を通じて、無事、岐阜県側に下山しているとの連絡がはいり、村営ホテルに設けられた救助対策本部からはよろこびの歓声があがった。

流言飛語乱れとぶ

◇…焼岳の噴火は、文献によると天正年間に大爆発があったと記録され、それ以後、大正十四年ごろまで活動がはげしかった。とくに大正四年の噴火では泥流が梓川の流れをせきとめ、いまの大正池ができた。昭和にはいってからは七年、十年、十四年、二十八年、三十四年と火山活動が活発となったが、七年をのぞいては鳴動ていどの小規模のもので、こんどの噴火は、規模からいって七年いらい三十年ぶりのものだった。七年の噴火のさいは、まだバスが開通してなく、徳本峠を越えて上高地へはいった時代で、いまほど観光地として発達してはいなかった。このため、かなり古い山小屋や旅館の主人でも、この噴火をみたものは少ない。それだけに、たとえ中規模とはいっても、焼岳の噴火をこんどはじめてみる人がほとんどだった。地軸をゆるがす鳴動と天を突く噴煙にはすっかりおどろいたわけで「焼岳の小屋には二十人くらいの登山客がいる」とか「岐阜県側には真っ赤な溶岩が流れだしている」などの流言飛語が乱れとび、かけつけた警察や地元消防団、報道陣をあわてさせた一幕もあった。

三日間、降灰で灰色一色に塗りつぶされた上高地も、二十一、二日の雨でふたたび緑をとりもどした。鳴動もやみ、わずかにのぼる噴煙が、恐怖の一瞬を思わせるだけとなったが、上高地の人たちの不安は、まださらない。「このままおさまるのなら、焼岳の白煙は上高地に趣をそえ、かえって客があつまる」と抜け目のないところをみせているものの、年間三十万人以上もの観光客をあずかる地元として、こんどすこしでも危険があるということなら、万全の予報措置をしてほしい―というわけだ。火山灰が泥流となって上高地沢を埋め、一部が大正池にそそぎこんだことも、こんど梓川の流れをせきとめ、上高地が浸水するのではないかとの新たな不安をいだかせる原因をつくっている。

予報施設の設置要望

◇…老朽火山とされ、大きな危険はないとされていただけに、こんどの噴火は、専門家の間ではあるていど〝寝耳に水〟だったようだ。「噴火といっても水蒸気が若干出るていどだ」といわれ、日本でも五指にあげられる観光地でありながら、なんらの観測施設もなかった。噴火が、シーズンにはまだ間があり、しかも、夜中だったからよかったものの、これがシーズン中だったら、一日に数百、数千人の人たちが登る焼岳だけに大惨事になっただろう。焼岳は、硅酸度がつよいという地質の上から予報がしやすいという。このため地元は万全の予報施設の設置をつよくのぞんでいる。東大地震研究所や信大文理学部地学教室などの学術調査団ものりとみ、①再び噴火はあるか　②その規模はどうか　③噴火の性質――などについて調査をはじめているので、ちかくこれらの結論が出されるが、もし、こんども噴火の危険性があるとしたら、多くの観光客のためにも、できるだけ早く、観測所の設置をのぞみたいところだ。

≈焼岳≈ 小爆発　危険をおかして火口付近を調べる信大調査班（6月20日）

週間のニュース

信濃毎日新聞　昭和37年6月24日　掲載

6/27 信毎

摂氏92―93度を記録

信大文理学部で測定 焼岳爆裂口の温度

三十年ぶりで噴火した焼岳は、その後鳴動もなく静けさを続けているが、焼岳の調査をしている信大文理学部地学教室は、二十六日、熱電流計で爆裂口の温度を測定した。その結果、摂氏九十二度から九十三度を記録したが、これは昭和七年の噴火時の二百七十五度にくらべはるかに低く、また二十八年の鳴動があったときの九十四度にくらべても低い。結局、噴気に関するかぎり、焼岳は、しだいに衰微の傾向があることがわかったが、こんごも噴火があるとしたばあい、その規模を推定するには、さらに噴出しているガスの分析をおこなう必要があると、同教室ではしている。

焼岳については、このほか東大地震研究所でも、上上堀沢の湯沢出合い付近など六ヵ所に地震計をすえ、本格的観測をはじめているが、二十一日から二十六日までに焼岳自体の震動はみられていない。このように、いまのところ焼岳自体は静かだが、噴火にともなう泥流の流出がはげしく、上上堀沢上流では、二十日流出したときにくらべ二十六日は十数倍の泥流に埋まっている。二十六日の信大地学教室の調査では、爆裂口から、砂礫以外の白濁の泥流が流れ出し、上上堀沢にたそいでいるので、このままでは、ちかく大量の泥流が大正池に流れこむ危険性もあるとみており、地元南安曇安曇村や上高地の旅館業者の間で早急に砂防工事をするよう建設省にのぞむ声が高まっている。

信濃毎日新聞　昭和37年6月27日 掲載

6/29 信毎

水上教授(東大)も参加

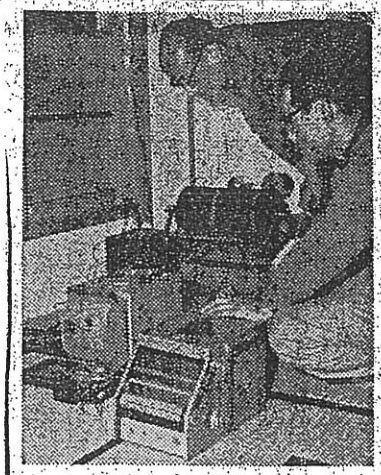
〝焼岳爆発〟を調査研究

爆発して焼岳を学術的な立ち場から調査するため、東大地震研究所火山物理学担当の水上武教授は、二十八日夕上高地に入山、四日間の予定で上高地の安曇村村営ホテルを基地に調査をはじめた。二十八日夜は噴火直後、すでに同村営ホテルに観測機械を設置して地震観測をつづけている東大地震研究所員とこれまでの観測データを検討したが、こんどの調査でかなりくわしい観測結果が得られる見通しである。

水上教授の調査は、焼岳の噴火活動を通じて噴火が引き起こすが害をどのようにしてふせぐかの手がかりをえ、あわせて学術研究をしようというのがねらいである。おもな調査内容は▽噴火山と地震との関係から現在観測している地震がどのていどの深さにあるのか、深さと エネルギー源との関係▽火山活動はとんども活発につづくか▽噴火の規模はどのていどで、その力は危険度の高いものか▽流出する泥流が山ろくに与える影響はどうかーなど。

これまでの地震計によるデータとこんどおこなう焼岳の現地調査結果を総合して調査研究の結論を出すことにしている。

水上教授の話　焼岳では昭和二十八年に人体に感じられるほどの地震があり、いまとおなじ東大地震研究会員らと二、三ヶ月間長期滞在して調査したことがあるだけに、こんどの噴火活動と地震との関係は強い関心を寄せている。いまのところ噴火の規模とか、この危険性などについて、はっきりしたことはいえないが近日中にかなり具体的な観測結果を出すことができると思う。



地震計を調べる水上教授(向こう側)

信濃毎日新聞　昭和37年6月29日 掲載

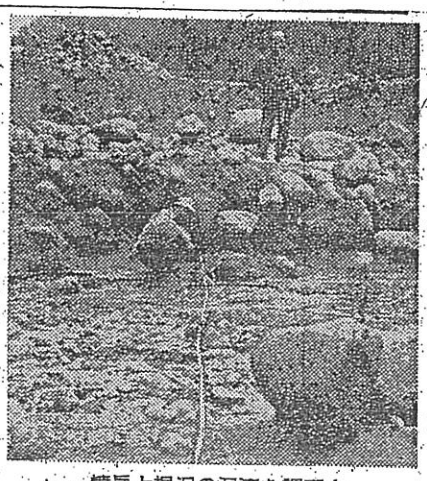
6/30 信毎

噴火による〝泥流〟

焼岳上堀沢の土砂　水上教授が確認

二十八日夕刻、上高地に入山した東大地震研究所水上武教授は、二十九日焼岳山ろくの地震につき、焼岳上堀沢、上上堀沢の実地調査をした。この結果、これまでたんに土砂の流出といわれてきた上堀沢は、噴火にともなう流出物をまじえた泥流であると結論、この泥流がここ数日間ひじょうに活発な流れとなって大正池下の梓川を完全にせきとめている事実を確認した。

この泥流は、大正池に面した焼岳山頂付近から西側に約一・五〝の長さでのびている。幅は途中では四、五十〝だが、梓川付近では百〝余りになり、さる二十二日ごろから大正池の東京電力霞沢発電所取水口下の梓川の流れをせきとめ、二十九日現は厚さ四、五〝の泥流が水の流れを完全にせきとめた。このため、東京電力では、泥流が取水口をうめるおそれがあるとして、連日ブルドーザーでたい積した泥流を掘り下げており、二十九日正午すぎには泥流の上をわずかな水がかよいはじめた。



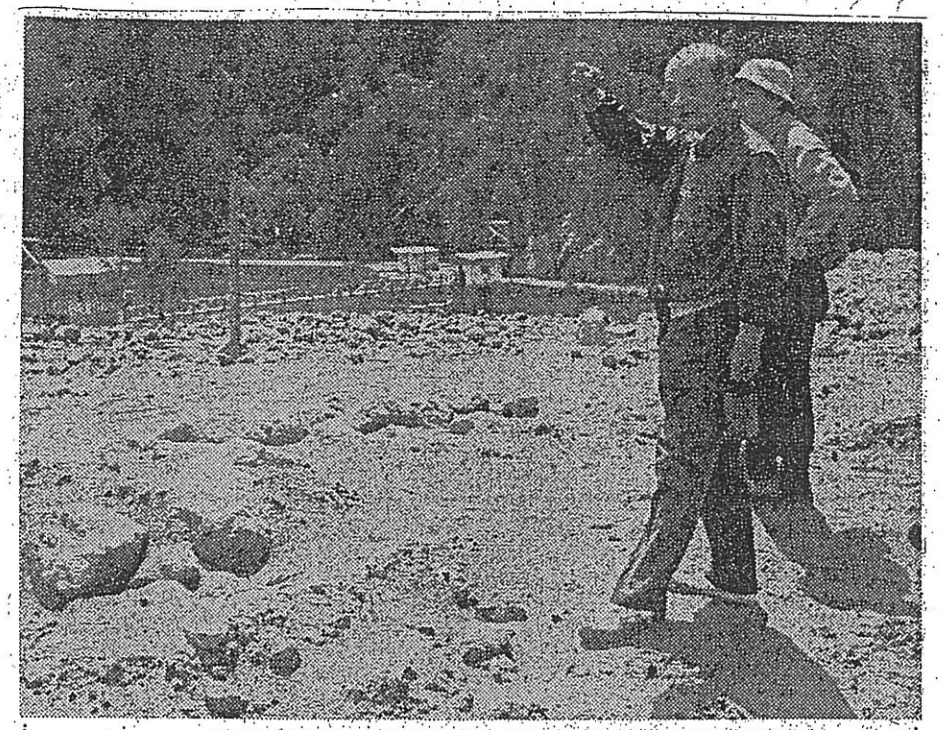
焼岳上堀沢の泥流を調査する水上教授(向こう側)ら

水上教授によると、この泥流は、焼岳山頂から梓川に達する上堀沢が、急斜面のため、火口付近の流出物と大量の降灰がわずかな雨でも、ドロドロのコンクリート状になって流れだしているものという。こんども沢にそった大きな石や土砂、立木をまじえてかなりの量が梓川にそそぐのではないかとみられる。

また、上上堀沢についても、規模のひじょうに大きな泥流が大正池にそそいでいることを確認したが、いずれも泥流の源一帯がもろい火山岩と灰なので、梓川への大量の流出が気づかわれている。

信濃毎日新聞　昭和37年6月30日 掲載

7/1 信毎



焼岳の泥流を調べる水上教授＝大正池の東電取水口付近

近い将来大爆発の危険ない

焼岳・水上教授語る

二十八日から北アル上高地で、焼岳噴火後の現地調査をしていた東大地震研究所水上武教授は、三十日夜いったん下山し帰京したが、下山前、上高地安曇村 村営ホテルで、これまでの観測結果について「ちかい将来、さくに大爆発をおこすようなことはないと思う」とつぎのように語った。

▽きゅう十七日夜の噴火後、焼岳山ろく、明神池一帯にかけて八カ所で地震計による地下振動の観測をしてきたが、それによると焼岳がちかいうちにとくに大きな爆発をおこすきざしはみえない。しかし、だからといって大爆発がまったくないということではなく、ことんでもいろいろな方法で観測をつづける必要はあるだろう。

▽焼岳の噴火口は、頂上から少し岐阜県側に下がったところを約1キロもの線状になってつづいており、めずらしいかたちのものだ。噴火口線上に、弱いキレツ面があり、この部分が内側の圧力で噴き出したものだろう。焼岳は火山としては老化しており、溶岩が流れ出すようなことは考えられない。しかし、おおぜいの人がくりこむ観光地なので、常時観測の体制がしかれればなによりだと思う。

▽泥流はかなり規模の大きなもので、とんでも雨のたびにはげしく流れ、梓川にそそぐと思う。大正池一帯には、かなりの影響をおよぼすのではないか。

信濃毎日新聞　昭和37年7月1日 掲載

梓川をせきとめる

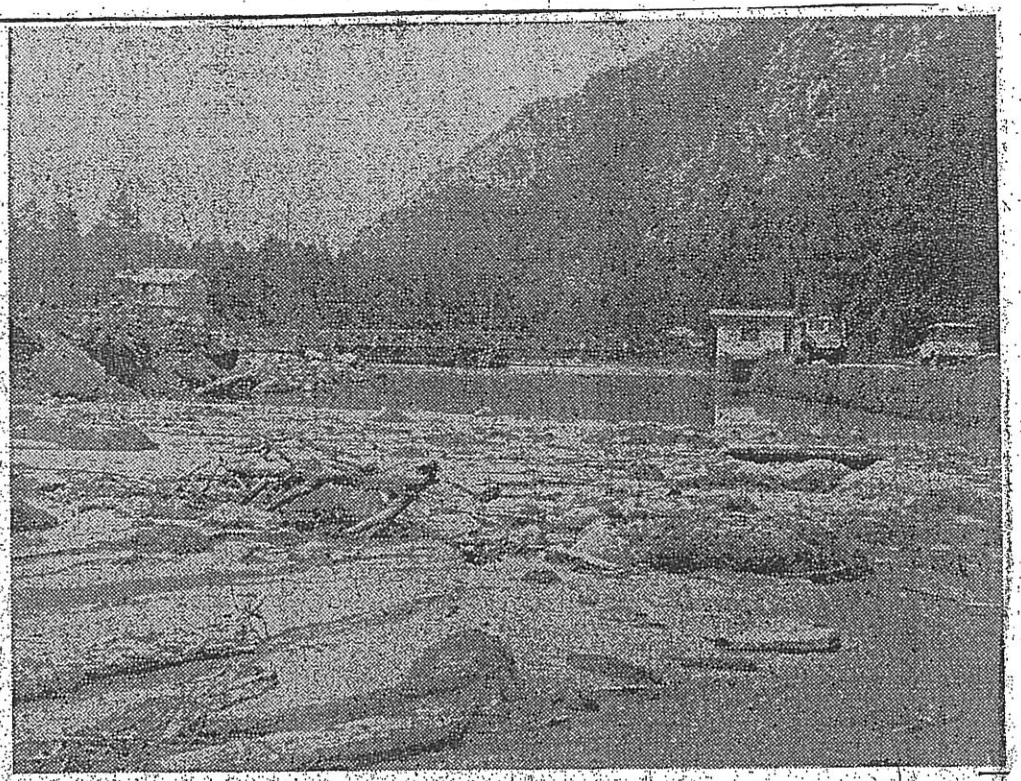
焼岳の泥流

焼岳の泥流は、ここ数日来の雨のため岩石をまりえて上堀沢から上高地大正池の東京電力霞沢発電所えん堤ふさんの梓川に押しだし、五日には川をせきとめた。松本建設事務所はこのままだと大正池がはんらんするおそれがあるとみて六日、現地を調査、緊急対策をとることになった。

東電松本電力所の話によると、梓川におしだした泥流は、一万立方㍍にのぼり、霞沢発電所えん堤のすぐ下から長さ百㍍にわたって約三十㍍の川幅を埋めている。堆積した泥流は、水面から四㍍あった県主要地方道上高地公園線とすれすれになり、さらに高さ三・九㍍の発電所えん堤もせきとめられた水の中に流せきとめられた水は、いまのところ発電所側の調整排水トンネルで排水できているので、支障はないが、泥流がさらに押しだしたり、降雨量がふえると排水トンネルだけでは水をのみ切れなくなり、大正池がはんらん、災害がおきる危険があるという。このため松本建設事務所はブルドーザーなどで、とりあえず水が流れるていどのみぞをつくり、この間、建設省と協議のうえ、本格的な対策をたてる準備をすすめている。

7/6 信毎

信濃毎日新聞　昭和37年7月6日 掲載



焼岳泥流、大正池へも

松本建設事務所 近く取りのぞき作業

松本建設事務所は六日、焼岳の泥流でせきとめられた上高地大正池の東電霞沢発電所えん堤ふさんの梓川一帯を現地調査した。この結果、上堀沢から一キロあまり上流の上堀沢から押しだしていた泥流もここ数日来の雨で大正池へはいり、このためすでに池の水位が一メートルほど上昇していることがあきらかになった。同建設事務所はこのままだと池があふれて災害をまねくおそれがあるとして九日からひとまず、せきとめられた水をはく水路を泥流が累積している梓川に掘り、ひきつづき本格的は泥流をとりのぞく作業にかかることをきめた。

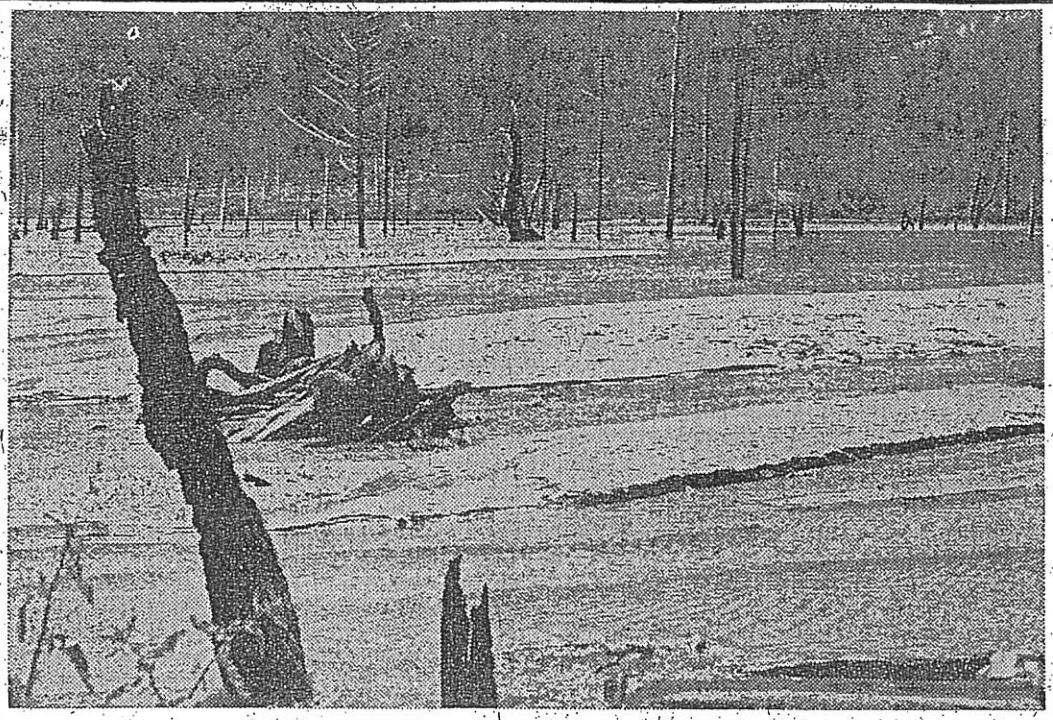
現場はひと雨ごとにようすが変わり、東電霞沢発電所えん堤のすぐ下から長さ百メートルにわたり、約三千メートの川幅が泥流にうまった梓川には、五、六回目の雨でまた新しい泥流がかぶさった。せきとめられた水は、あるていど発電所側の調整排水トンネルで、泥流累積地帯の地下をくぐり一キロメートルほど下流の梓川に放出されているので、いまのところ問題は少ない。

松本建設事務所は、泥流のとりのぞき作業に大型機械を使いたい考えだが、上高地線金トンネル（延長五百十五メートル、幅三メートルないし五メートル）の幅がせまいため、機械を現場に搬入することがむずかしく、対策に頭を痛めている。

泥流でうまった東電霞沢発電所えん堤ふさんの梓川

7/7 信毎

信濃毎日新聞　昭和37年7月7日 掲載



小さくなってゆく大正池

小さくなる上高地の大正池

焼岳の泥流が流入

治水に影響　来月から緊急工事

中部山岳国立公園・上高地の「大正池」は、うちつづく雨で焼岳の泥流がはいり、小さくなっている。大正四年に焼岳が爆発してできたころ二十数万平方㍍もあったのが、そのこの土砂流入ですでに二十万平方㍍を割っている矢さきだけに、建設省信濃川水系砂防工事事務所は信濃川水系の治山治水に与える影響も大きいと頭を痛めている。この結果、総予算三十億円で大がかりな国営砂防工事をおこなう年次計画をたて、とりあえず緊急工事として来月から工費八千九百万円で土砂どめ施設を急ぐ準備をいそいでいる。

東京電力松本電力所の調べによると、同電力が昭和三年秋、梓川霞沢発電所設置にともなう取り入れ口を大正池につくったころ、二十三万平方㍍だったものが、さいきんは十九万平方㍍に縮小した。このあおりをうけて、ひところ六十五万立方㍍にのぼっていた貯水量もいまではわずか十六万立方㍍に減った。しかし、こんどの焼岳爆発で面積、貯水量ともさらにけずられる公算が大きい。

このため建設省信濃川水系砂防工事事務所は昭和六十年ごろまでの長期年次計画で焼岳の山腹を走る「上上堀沢」、「上堀沢」、「中堀沢」、「下堀沢」を中心に三十余基の土砂どめえん堤とこれにともなう床固めなどの施設を完備することになった。今年度は、さきごろの焼岳爆発にともなう緊急工事として上上堀沢に砂どめえん堤、床固め工各二基、また上堀沢には砂どめえん堤一基をつくる方針で、このほど建設省へ認可の手続きをとった。

こんどの焼岳の爆発による泥流は上堀沢を押しだして大正池のすぐ下から長さ百㍍にわたって梓川をせきとめた（せきとめられた水は大正池にある発電所調整排水トンネルで排水しているため、いまのところ支障はない）ほか、それより一㌔ほど上流の上堀沢にも泥流が押しだして数日前から大正池へはいるようになった。

建設省信濃川水系砂防工事事務所東京電力松本電力所の話だと、ことに上上堀沢に累積している泥流の量は四、五十万立方㍍にやはりこんどの豪雨などでどんどん大正池へなだれ込む可能性がつよく、ばあいによっては大正池が上上堀沢からの泥流で"ヒョウタン形"に変わるか、あるいは中断されて新しい池・昭和池（仮称）ができる気配があるといっている。

7/10

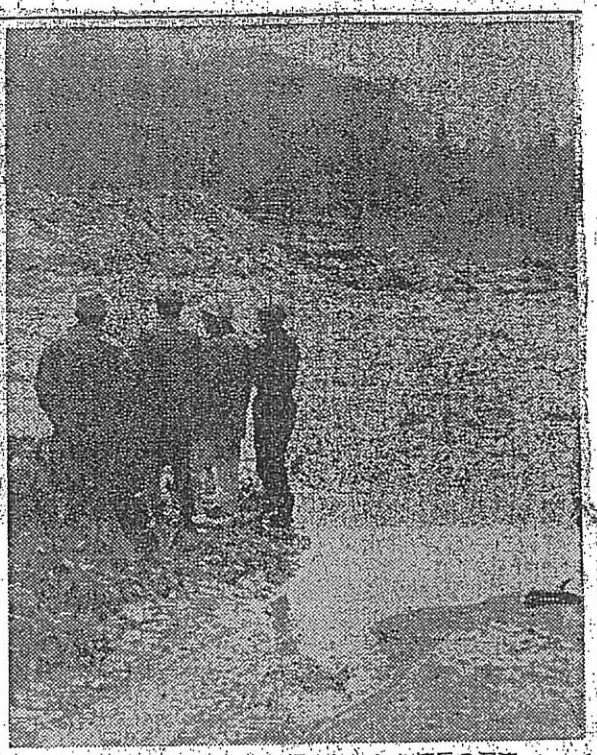
信毎

信濃毎日新聞　昭和37年7月10日 掲載

泥流、県道も埋める

ハイカー、一時カン詰め

上高地



自動車道路（県道）まで埋めつくした焼岳の泥流

北アルプス焼岳は十二日早朝、小爆発をおこしたが、この爆発の震動による影響と朝から降りつづいた雨で、午後三時ごろから、上堀沢の泥流がまた上高地大正池の東京電力霞沢発電所えん堤ふきんの梓川に押しだし梓川について対岸の県道上高地公園線も埋没、不通となった。

現場ふきんの梓川は今月初旬からすでに長さ百㍍にわたって岩石まじりの泥流でうまり流れをせきとめていたが、この日押しだした新しい泥流は梓川をのり越えて県道を約三十㍍も埋め、道路上の泥流は深いところで一・五㍍も累積した。このため松本電鉄、おんたけ交通、濃飛各社のバスはストップ、約八百人のハイカーが一時、上高地にカン詰めとなったが、松本電鉄バスは午後二時五十分松本発から現場で折りかえし運転をはじめている。

上高地は同夜もつづいて雨が降っているので、松本建設事務所はブルドーザーによる復旧作業もできず、天候の回復をまっておこなう予定。

上高地から帰りをいそぐ一部の観光客は、不通となった道路近くの山を高巻きしてバスに乗りつぎ下山しているが、傾斜が急ですべりやすいため、上高地旅館組合ではロープをはったり、高まき道路の整備にのりだしている。東電霞沢発電所では大正池の水を調整排水トンネルから排水しているので、大正池の水がはんらんする心配はいまのところないが、上堀沢から一㌔ほど上流の上堀沢の泥流が大正池にどんどんはいるようになれば、上高地に水があふれる危険性が大きいので、地元では早急に砂防対策を講ずるよう県や建設省にのぞんでいる。

焼岳が小爆発

十二日午前五時三十分ごろ焼岳が鳴動とともに小爆発をおこし、かなりの灰を上高地一帯に降らせた。鳴動は約十分間つづいてやんだ。この日上高地一帯は大雨のため、約四百人の観光客はこの爆発に気がつかず、混乱もなかった。

焼岳付近の大正池旅館の話 たいした爆発ではなかったが、かなりの鳴動とともに雨にまじってすこし灰が降った。この前の半分にもおよばないものだが、ガスが濃く焼岳がみえないので、きっぱりようすがわからない。

中ノ湯、坂巻温泉の湯量などかわる

焼岳爆発の影響か北アルプス焼岳ふもとの中ノ湯、坂巻温泉（南安曇安曇村）などで、爆発の影響か二、三日まえから湯量がかわったり、湯温があがるなどの現象があった。焼岳は十二日に小爆発したことから、温泉関係者などはその前兆だったのではないかとみている。

焼岳南側にある中ノ湯温泉（経営者小林檜晶さん）では十日ごろからゆう出するお湯の量が三分の二ほどに減り、野天プロのお湯はほとんどなくなった。湯温もそれまで八十度だったのが九十度ちかくにあがった。中ノ湯から約三㌔離れた坂巻温泉（経営者上松きと江さん）でも十一日夕方から湯量がかなりふえ、温度も三、四度くらいあがった。しかしいずれも地震などの前兆はなく、豪雨のためか十二日の爆発にはまったく気がつかなかったという。

7/13 信毎

信濃毎日新聞　昭和37年7月13日 掲載

二人が爆風でケガ

焼岳小噴火

九日午前九時十分ごろ、北アルプス焼岳が小噴火した。松本測候所によると、午前九時十分ごろから約三分間にわたって爆動がつづき、ふもとの上高地一帯にはうっすらと灰が降った。焼岳の小噴火は十四日ぶり。

◇　◇

九日朝の焼岳小噴火で、登山禁止の立て札を無視して登っていた二人の登山者が爆風にあい、軽傷を負った。

この二人は、[redacted]、会社員[redacted]さん(三〇)と、同市大門通り一条北入る、新潟大二年生[redacted]さん(二〇)で、小噴火のあった九時十分ごろ焼岳小屋ふきんで爆風にあい、飛んで来た石にあたって[redacted]さんは全身打撲で三週間、[redacted]さんは頭にケガをした。[redacted]さんの話　こうう音と爆風があって間もなく、大きな石がくずれ落ち、小石が降ってきた。灰やガスにまかれ、石にからだを打たれたときは「もうダメだ…」と思った。登山禁止の立て札を気づいしなかったのがわるかったと思っている。

8/10 信毎

信濃毎日新聞　昭和37年8月10日 掲載

氷はけ水路の掘削はじまる

焼岳の泥流対策工事

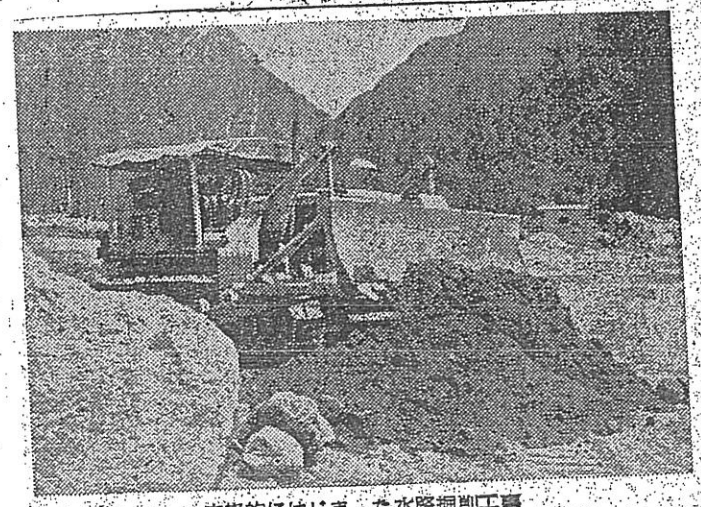
焼岳の爆発で上高地の梓川を埋めた泥流対策は、ようやく軌道にのり"排泥路"の設置について、せきとめた水をはく水路の掘削工事が台風シーズンを前に十二日から本格的にはじまった。

泥流で梓川が埋まったのは上高地大正池の東京電力霞沢発電所えん堤のすぐ下から約二百㍍。このあたりの川幅はかつて三十㍍ほどあったが、建設事務所が建設省防災課と協議した結果、埋めた泥流を全部取り除くことは困難だとし、深さ三㍍、幅十㍍の水路をこの部分に掘る方法を採用し、九月中旬までに完成させることにきまった。

大正池はこのため水位がいまも一㍍ほどあがっているが、発電所側の調整放水トンネルで泥流堆積地帯付近の地下をくぐらせて一㌔ほど下流の梓川に放出しているため、いまのところ問題はない。

すでにできあがった排水路は、こんど焼岳の上堀沢から押し出す泥流を安全なところへ誘導することをねらいに、水路掘削工事現場のすぐ近くにつくったもので長さ百㍍、深さ五㍍、幅十㍍となっている。

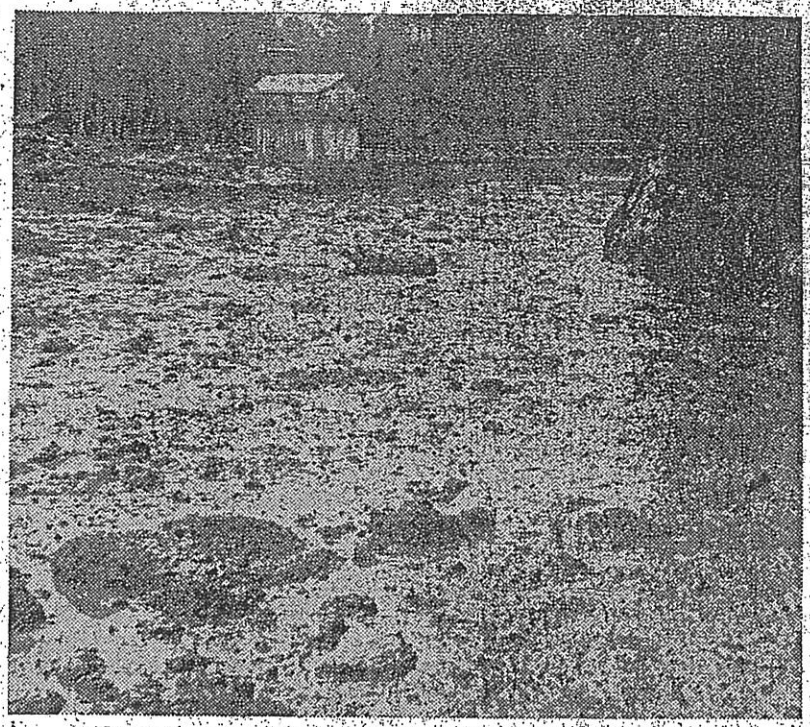
高級清酒
神渡
ミワタリ
広谷
豊島屋



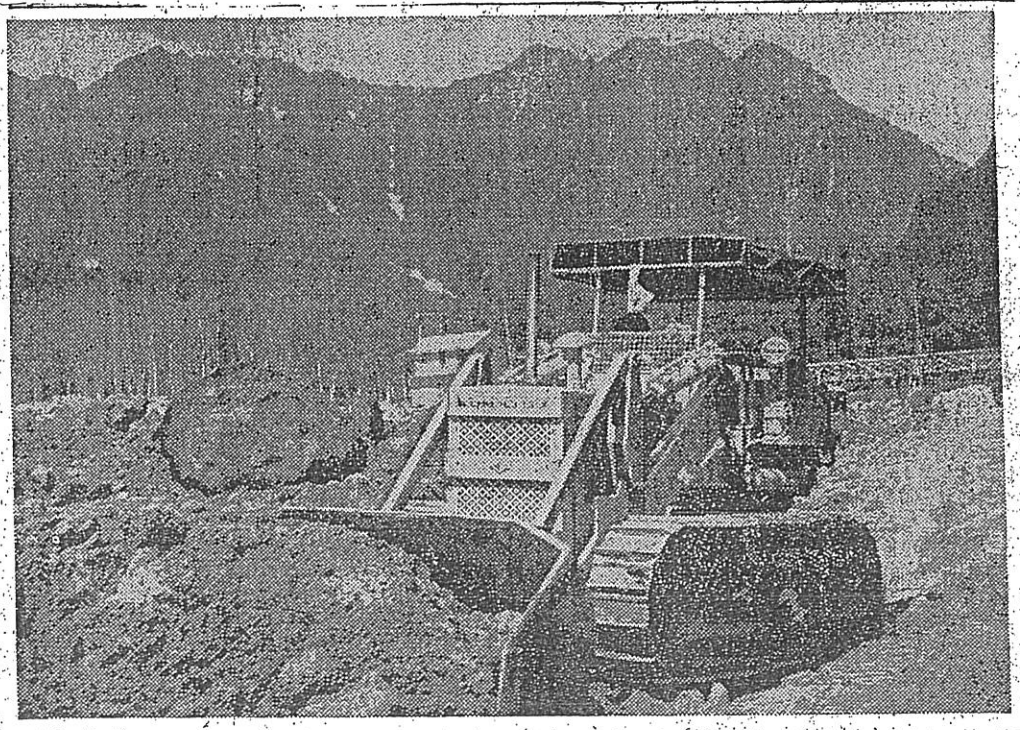
本格的にはじまった水路掘削工事

8/13 信毎

信濃毎日新聞　昭和37年8月13日 掲載



焼岳の泥流で埋まった県道上高地公園線（東電霞沢発電所取入口付近）



はじまった泥流の取り除き作業

上高地で緊急防災工事始む

"非泥路"などつくる

松本建設事務所は、焼岳の泥流で被害をうけた上高地大正池ふきんの県道上高地公園線と梓川にたいし、十四日から予算八百万円で緊急防災工事をはじめた。

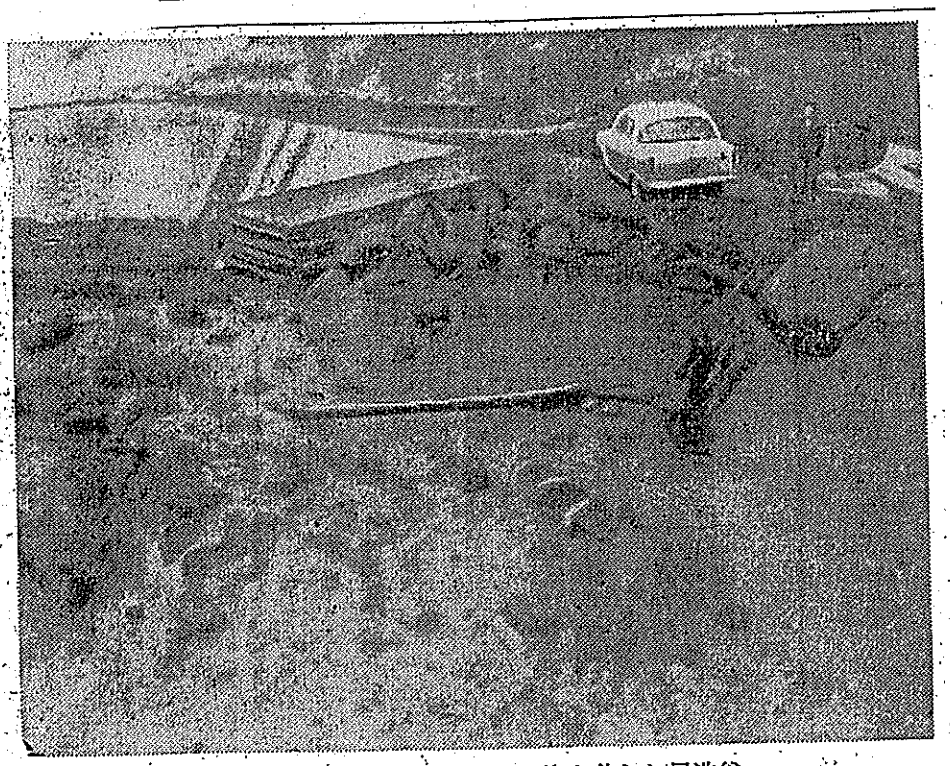
工事の内容は、①県道上高地公園線の泥流が累積した部分を中心に、長さ百㍍にわたって土砂をつみ上げ、路面を二㍍高くする。②泥流にうまった梓川の川底を整理し、増水している大正池をはきたす水路約百五十㍍を開設する。③泥流が押しだしている上堀沢には、新しくおしだしてくる泥流を被害の少ない梓川下流へ誘導するため、延長百㍍ほどの"非泥路"をつくる―の三つ。

十四日からはじまった工事は路面のかさあげが主体で、他のふたつの工事は建設省の了解を得てから本格的に着手する方針である。

8/15

信濃毎日新聞　昭和37年8月15日 掲載

朝日新聞　1962年6月19日付



雨で流れ出した噴出物でドロ海と化した足洗谷

岐阜県側はドロ海

焼岳また爆発　雨で噴出物流れ

【中尾＝岐阜発】焼岳は十八日夜から十九日未明にかけて、またかなり規模な爆発があり、多量の火山灰や土砂などをふき上げた。しかも十九日朝、山で雨が降ったため、斜面に積もった噴出物がどっと岐阜県側の足洗谷（あしあらいだに）に流れ出し、濁流は真黒な水が流れている。雨は夜が明けるころあがり、水もふえなくなった。

押出された噴出物はどろどろのセメントのようで、岐阜県吉城郡上宝村中尾地区の上流にある建設省の砂防エン堤工事現場付近は一面のどろ海、工事中のエン堤近くには高さ二メートルほどの大きな石が上流から流されてころがり、工事用の仮橋が流された。

地元の人たちの話では雨量はそうひどくないのに、こんな被害が出るのは、どろどろの火山灰が押し流したのではないかといい、大雨になったら、もっと大きな被害が出るのではないかと新しい不安を感じている。

上高地は降灰やむ

【松本】十九日朝の上高地は、小雨模様で焼岳はまた噴煙が続いているが、降灰は朝方からやんだ。灰色に包まれていた上高地も前夜来の雨で緑が七分通りよみがえり、上高地を訪れる観光客も平常通り続いている。

〝長くはつづかぬ〟

村井理博の話

【松本】北アルプス焼岳の噴火活動を調べるため、東大地震研究所村井勇理博と平賀、宮崎両技官は二十日上高地にはいり、地震計などをすえつけ観測をする。主なねらいは大噴火がこんどの一回だけでおさまるか、続いて起るかをみるためで、数日後には観測の結果からみ今後の動きがかなり分かるというが、村井理博は十九日松本で次のように語った。

焼岳の噴火はいままでの例でいずれも短期間あるいは一度だけでおさまっている。したがってこんどもそんなに長く続くとは思えない。焼岳は、溶岩を流し出すような火山ではないので、上高地の旅館などに直接被害は与えないが、噴火と同時に水を多量にふき出すため泥土を押流し、大規模なものは川までせき止める。大正四年の噴火で大正池をつくったのがその例だ。

盛んな噴煙つづく

焼岳

焼岳は十九日になっても盛んに噴煙を高く上げていた。上高地の人たちはもうすっかり平静さを取戻し、旅館では火山灰でザラザラになった部屋や廊下の掃除をしていた。この日松本からはいった観光客は約二千人で、噴火をわざわざみにきた人もあり、河童橋付近はカメラの列が並んで、火山灰がもっとも降った大正池付近は木もササも道路も灰に汚れたままだが、釜トンネルから下流は前夜の雨で汚れを落し、緑も美しさを取戻した。同日もまた小爆発があって話題を呼んだ。

道に大きな穴

上高地線道路が十九日午前十一時ごろ長雨のため、前川渡付近で真径六十センチほどぽっかり穴があき、このためバスは一時不通になった。

5/20　朝日

毎日新聞 1962年6月21日付掲載

焼岳噴火 観測活動始まる

信大、東大地震研など

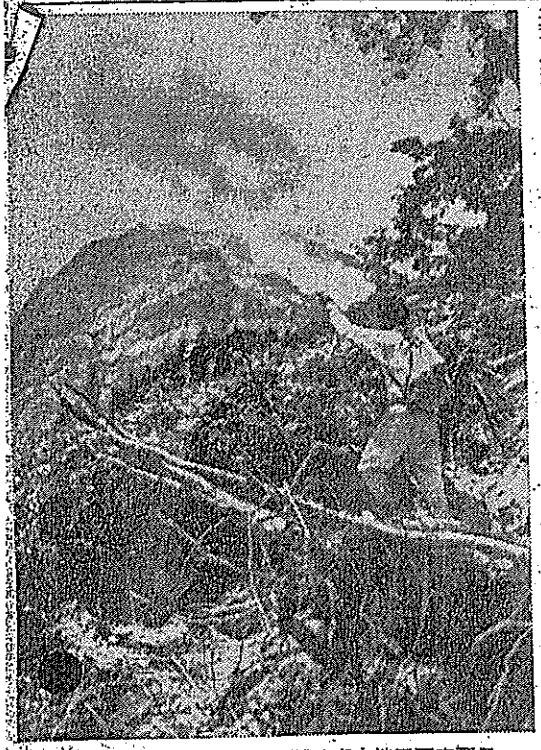
噴煙をあげつづける北アルプス焼岳の火山観測のため二十日東大地震研究所、信大などの観測調査班が上高地にはいり、活動を始めた。十九日午後再び三回にわたって爆発、高熱の泥流を大正池に向かって押し出した焼岳はその後爆発もなく噴煙もやや少なくなったが依然として鳴動している。

夏山シーズンをひかえこの"怒る焼岳"に科学のメスを入れるため二十日朝、東大地震研究所宮崎、平賀、鈴木の三技官が電子地震計八台など観測器材を積んだ車で上高地にはいり、安曇郡安曇村営ホテルを本部にして焼岳山ろくに地震計を配置、観測を始めた。同地震研究所村井理所も地質面の調査で入山、信大地質学教室小林国夫教授を主任とする調査班もはいった。

○…火山灰一色にぬりつぶされていた上高地にもようやく山の緑がよみがえり二十日は快晴、上高地の住民もほっと一息の表情。新名所？噴煙見物の登山客の姿も見られる。

○…ハイキングコースの標柱はまだ火バチの灰をかぶりまいたような火山灰でよごれ一雨ほしいところだが、雨になると焼岳では十分も積った灰がどっと大正池に押し出す危険もあるという。

宮崎技官の話　約三週間の予定で地震観測を行ない爆発後の活動、今後の状態を調べる。水上主任教授は二十五日ごろ上高地にはいるが、それまでに客観的な資料を集めたい。



焼岳山ろくで測定器の線を張る東大地震研究所員

毎日新聞 1962年6月20日付掲載

焼岳の爆発続く

6/20 毎日

【上高地で柳本、田中記者】十七日夜、爆発した北アルプス焼岳は、二晩過ぎた十九日も相変わらず噴煙を吹き上げ、鳴動を続けているが、同日午後二時十分ごろ再びかなりの爆発が二回あり、上高地の人たちは戸外へ飛び出すほどだった。

大正池からみると噴火口の一番下方の峠沢（登山道）付近からかっ色の岩石が泥流ようのものが、長さ四、五百メートル幅で数十メートルにわたり大正池に向って流れ出している。

松本測候所で注意報

【松本】松本測候所は十九日午後「焼岳の爆発は今後も続くので登山はしないよう。また降雨で積もった灰が泥流となって河川の流れを変えたり、鉄砲水になる恐れがある」と注意報を出した。

観測班、現地に出発

【小諸】東大地震研究所平賀士郎、宮崎勤部門技官は火山観測を行なうため十九日、浅間山にある浅間火山観測所から電子地震計八台を持って現地に向かった。

信州大でも

【松本】信州大学文理学部地質学教室では十日、小林国夫教授ほか職員五人、学生数人の調査班を送る。

信州大学地質学教室・小林国夫教授の話　二十日東大地震研究所員村井勇理博とともに現地に行くが、また爆発したとなると噴火口の地質に大きな変化が生じているものと思う。この分ではまた爆発はつづくだろう。

すさまじい泥流

十九日午後の爆発で、流れ出した流動物は泥流らしいが、現場近くにいた沢田厚生省国立公園管理員はつぎのように語った。

ゴオーッというゴウ音がしたとたん、焼岳小屋付近から黒い流動物があふれ出し、見る間に直径五、六メートルの大石がゴロゴロ動き出し、直径七〇センチの大木もメリメリ押し倒された。無気味な動物のようにはい出した泥流のようなものは蛇のよう。

正面ルートの登山路にそって峠沢に音を立てて落ち込み、約千六百メートルはい幅に流れて大正池にかかるところでとまった。それ以来、噴火口から聞こえていた鳴動はピタリとやみ、たゞ煙が出ているだけだった。

昭和３７年６月１８日　月曜日

岐阜日日新聞

創刊８３年

発行所
岐阜日日新聞社
岐阜市今小町９
電話 代表 岐阜②5151番
© 岐阜日日新聞社 1962

北アルプス焼岳が爆発

中尾部落17戸など避難

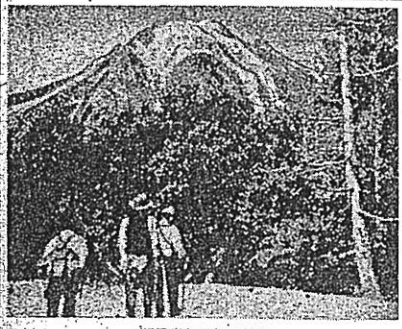
【上高地】北アルプス焼岳は午後九時五十分ごろ、ものすごいごう音とともに噴火、頂上から黒い煙がふき出した。上高地からは火柱は見えなかった。午後十一時ごろ、ものすごいごう音とともに噴火、頂上から黒い煙がふき出した。上高地からは火柱は見えなかった。午後十一時ごろ、お焼と灰が上高地の宿舎いっぱいに降っている。この日上高地から焼岳方面への登山者は約二百人。ほとんどが同日中に下山したが、焼岳小屋、西穂小屋には約二十人が泊まっているもよう。とくに頂上付近の焼岳小屋には従業員二人が泊まっており、同現地に安曇村消防団員ら二十人の救助隊が現地に向かった。

【岐阜】岐阜県野麦峠にはいった情報によると、十七日午後九時五十分ごろ、北アルプス焼岳（標高二四五八メ）が地響きを立てて噴火した。このためふもとの吉城郡上宝村中尾部落の十七戸八十七人が避難を始めた。

県側への降灰なし

【飛騨】高山市内では爆発音は聞こえず、高山測候所で異常音響を観測したほか、特に異常はなかったが、平湯峠付近から焼岳山頂付近でが立ちのぼるようすが観察できた。山頂から約四・二キロの吉城郡上宝村中尾部落では強い地響きが続き、焼岳はもうもうと白煙を吹き上げ火炎が空をこがしているのがはっきりと見られた。火山灰は西風のため岐阜県側へは降らなかった。

帝国ホテル管理人村木孫さん（北アルプス救助隊長）の話　ゴオッという地鳴りと爆発音に驚いて外へとび出すと、キノコ雲が上がり見る間に高さ数百メートルになった。間もなく十センチ黒いゼスがいっぱいにひろがってきたので、なにも見えなかった。灰が降り始めたがいぜん地鳴りと噴煙が続いている。爆発した位置は溶岩の火も見えないし、噴煙の出た場所からみて中腹で、岐阜県側とみている。私が上高地にはいってから昭和六一年まで小爆発が続いたが、こんな爆発は初めてだ。


爆発を起こした焼岳

小爆発と発表

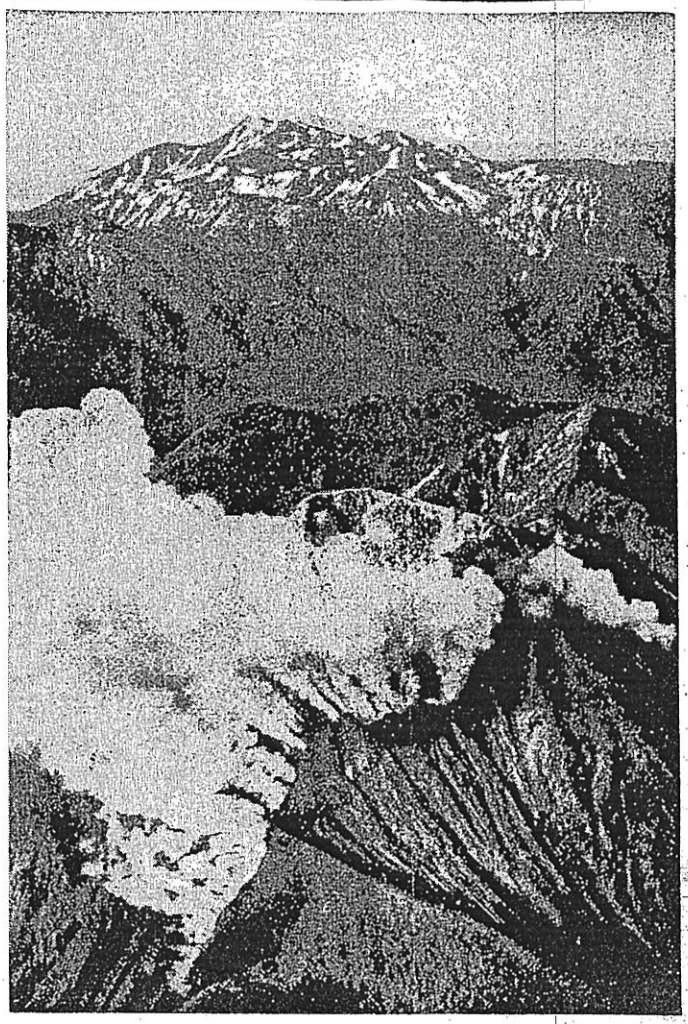
気象庁予報部は十七日午後十一時半「北アルプス焼岳が十七日午後九時五十五分小爆発を起こし上高地、大正池付近に二～三センチの降灰があり、その後噴煙を吐き続けているが被害はないもよう」と発表した。

「焼岳（二四五八メ）＝日本アルプスでただ一つの活火山として有名。明治いらいたびたび爆発を繰り返し、現在の大正池をつくった。その後は休止状態を続け大正池、田代池と並んで上高地をめぐる美しい風物となっている。頂上には大きな噴火口はなく、三つの小噴火口を中心として白煙を吹いている。」

岐阜日日新聞　昭和３７年６月１８日付掲載（現岐阜新聞）

岐阜日日新聞（夕刊）　昭和37年6月18日　月曜日

岐阜日日新聞
夕刊



爆発し噴煙あげる焼岳。後方は雪をいだくは乗鞍岳（共同特別機から）

小屋の二人助かる

【焼岳【爆発】降灰でかすむ上高地

【上高地】十七日夜北アルプス（焼岳（海抜二、四五八メ）が昭和七年いらい三十年ぶりに噴火、焼岳小屋にいた二人の従業員のうち一人は負傷、他の一人も助かった。

（関連記事三面に）

一夜明け焼岳は上高地の旅館の話によると、朝方まで続いていた鳴動は午前九時現在やんだが、降灰は続いており、白煙が西風に乗って長野県側に流れている。山の天気は晴れているが上高地一帯は降灰でかすみ、どんよりと曇っている。十七日午後方面への登山者は約二百人だったが、ほとんどが同日中に下山しており、登山者への被害はなかった。

しかし焼岳小屋にいた作業員二人のうち長野県[redacted]さん[redacted]は爆発と同時に区間者のまき割機づたいに逃げたため西穂小屋の村上寿さんら五人の救助隊に救い出されたが、足、頭などにケガをした。また消息不明の[redacted]さん[redacted]は生存が危ぶまれていたが、吉城上宮村後尾で救助された。

こんどの焼岳の爆発について信大文理学部地質学担当の桑井節夫講師は「今後しばらくの間は危険な状態が続くのではないかと思う」と警告を発している。

【長野】十七日夜上高地大正池にある長野地方気象台の気圧気象観測所からの報告によると、北アルプス焼岳の爆発は同日午後九時五十五分で、鳴動とともに噴煙が四百メートルから五百メートル上がった。噴煙、火山弾

時間余で二、三センチの降灰があった。

なおこの爆発による噴煙は松本から見えたが、爆発直後の鳴動は松本測候所の地震計に記録されなかった。

【松本】焼岳には近い北アルプス西穂高岳の西麓小屋従業員等、村上寿さんから農林省への連絡によると、噴火したのは焼岳南西側の休火口とみられ、これで岐阜県側に新火口ができたもよう。上高地の旅館などの話によると「ゴウ」という地鳴りとともに耳をつんざく爆発音が聞こえ、間もなく黒い煙ガスが上高地一帯をおおい、灰が降り出した。六軒の旅館には従業員のほか観光客など約百人がいるが、一時はどこへ避難するかと大騒ぎだった。

焼岳の噴火で打ち上げられた灰は、午後十一時ごろ、西風に乗って松本平にも降り始め、南安曇郡安曇村中ノ湯、烏々あたりでは灰で真っ白になり、外を歩く人の顔が真っ白になった。松本市内には十八日午前零時ごろから灰が降り出した。

避難民もかえる

【岐阜】焼岳から西へ離れた登山口の岐阜県吉城郡上宮村中尾部落の十七戸八十七人のうち約二十人は、爆発と同時に同部落から約二キロ離れた同村浦田部落へ避難した。しかし十八日午前零時すぎ噴煙がやおさまったので部落に帰った。神岡警察署巡査部長派出所の佐藤部長の話によると、岐阜県側には降雪や灰は全然降っていない。

焼岳とは

▽焼岳（二、四五八メ）＝岐阜、長野県境にある珍しい霧状活火山。御岳火山帯に属し、日本アルプスでただ一つの活火山として有名。明治いらいたびたび爆発、大正四年六月六日の大爆発では泥の流れを押し出し、梓川をせき止めて現在の大正池をつくった。今回の爆発は昭和十四年いらいのもの。昭和にはいって十一回目の爆発。

岐阜日日新聞　昭和３７年６月１８日付掲載（現岐阜新聞）

共同通信社配信

昭和３７年６月１８日　月曜日

岐阜日日新聞（夕刊）　（第三種郵便物認可）

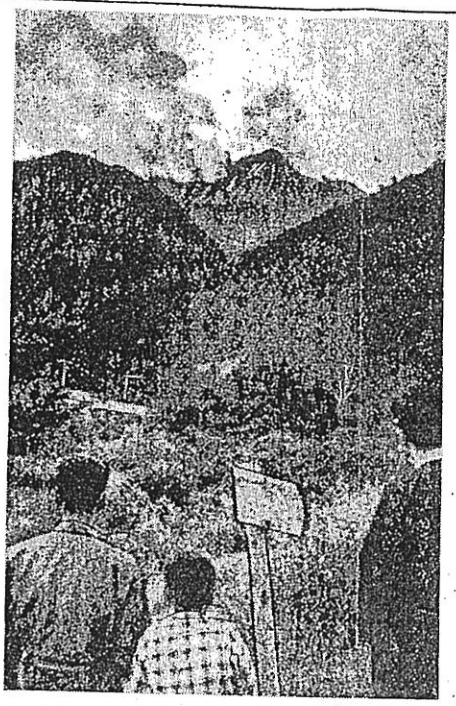
恐怖におののく村民

寝巻き姿で戸外へ

焼岳爆発

上宝村中尾

【神岡】＝中尾にて小島記者＝北アルプス焼岳噴火の報に今まで平和だった二十一戸、百人たらずの百姓村上宝村中尾の小さな部落は恐怖のどん底においこまれた。大正四年いらい四十七年ぶりの噴火なので、部落のほとんどのものがはじめて経験する恐ろしさである。山くずれかと思わせるぶきみな音とともに四すじの黒煙が大空にたえ間なくのぼりはじめたのだ。家がゆれ、しょうじがガタガタと音をたてる。部落じゅうのものが寝巻き姿のままで外へ飛び出し、避難準備をはじめた。しばらく地響きが続いたが、風向きが変わって「このぶんなら大丈夫」という声が、以前の経験よく知っている人々の口から出た。避難は間もなく解除された。



噴煙を吹きあげる焼岳＝けさ上宝村中尾部落で

火口からというより山全体から白煙をふき出しているかぶり。窓食と岩塊の山はただが焼岳はきょうはかりは燃えに燃えている。噴煙の高さは約三千メ、ちょうど背後にそびえる北アルプス槍ヶ岳峰の奥穂高と同じくらいの高さ。屋根二千四百五十八メの焼岳は低いながらも活火山の力を誇いっぱい誇示しているようだった。

○…中腹からちみれ出す泥流がすさまじい。火口壁から上裾、中尾へ、そして畑地ものガレ場に向かって、銀灰色の泥がどんどん押し流されていく。大正四年、一時にして梓川をせきとめた大正泥流が出現した恐ろしい光景だ。その泥流が大正泥の取り入れ口から梓川の上流付近まで流れ込んでいる。上流地の風物を代表した大正泥の神秘的な部面も半分ほど灰色に染って しまった。

○…中尾部の針葉樹林も一面の灰色、樹林小屋はあとかたもない。続の上流地は絶え間なく降る灰をかぶって陰うつな世界に変わっている。そしていつもはあざやかな光を放つ梓川が濁った水をたたえて力なく曲がっていた。

燃える山ハダ

噴火の上空を飛ぶ

【共同特別機にて富田、川上記者】焼岳がいたいて静に横たわる北アルプス連峰のなかで、焼岳だけがひとり、ただ一つ、のように荒れ狂っていた。激しい勢いで吹き上げる噴煙、銀色の斑灰で染め抜かれた山はだ＝霧山名に親しまれた焼岳は爆発の一夜が明けると、その山容を一変していた。

○…午前六時半、東京から二百五十キロを一気に飛んだ。中部山岳地帯の中でもひときわ険しくけわしいアルプス連峰。霧海の中に白馬、剣、槍岳、穂高が幻の城のように浮かび上がった。そのいかった肩の切れるあたり、鋭んに噴き上げる白い煙＝変わり果てた焼岳の姿がダイナミックな感じで迫ってきた。

○…いつもはおわんを伏せたようなかわいい山。その焼岳の北面がきょうは一面の灰におおわれている。頂上近くの北側斜面が噴火の中心になっている。それも一つの

岐阜日日新聞　昭和３７年６月１８日付掲載（現岐阜新聞）

共同通信社配信

怒り続ける焼岳

無気味な地鳴り

火山ガス鼻をつく

【飛騨】北アルプス焼岳（二、四五八メートル）が大正四年いらいたびたび鳴動していたが、四十七年ぶりの大爆発をした。吉城郡上宝村中尾部落と長野県上高地一帯は〝怒れるイオウの山〟におののき続けている。こんどの噴出の規模は十八日午後七時現在、いまも噴煙中の栃木県那須岳とほぼ同じようなものとみられている。（写真はたけり狂う焼岳を乗鞍岳山頂から見おろす＝十八日午後三時撮影）

焼岳を見おろす大展望者、乗鞍岳山頂へ登ってみると、眼前に見える焼岳が赤茶けた山はだのトロイデ型火山独特の顔をいからしたような格好をして乳白色の噴煙を西方へ流しながら、上空約三百メートルまでまきあがっている。噴煙と火山灰は上高地はもちろん穂高連峰、明神岳、六百山、槍沢岳あたりを灰色に包んでしまった。乗鞍山頂及平あたりから見ようとすると、十八日も終日、断続的に起きる鈍い〝ドーン〟という地鳴りとともにひときわ高く噴煙がまい上がりつづけた。風向きが変わって南方の乗鞍岳あたりへも黒をつくすこい部分ゆう酸ガスの臭いがたちこめた。噴出現地の地獄絵図が手に取るよう。幸い焼岳小屋の管理人、■■さんは、吉城郡上宝村側へ救援隊の手で救出された。さらに長野県■■■の実家へリレーされた。

両県側から焼岳への登山はもちろん禁止された。焼岳と乗鞍岳の間にある平湯温泉の人たちは十八日から十九日朝にかけ上空をおおう噴煙に悩まされ、一睡もしていない。十八日午後四時すぎ北アルプス一帯に一時的なしゅう雨が襲い、たちこめていた火山灰は一応、地上にたたき落とされ、やや澄んだ天空となった。平湯温泉や中尾部落の人たちは頭上で続く無気味な噴出に夜も昼もない緊張の日々である。

火山灰かきわけ

無我夢中、はって脱出

の弟
屋兄
小人
岳理
焼管

【神岡】飛騨＝北アルプス焼岳の噴火で絶望視されていた焼岳小屋管理人の■■さん（■）＝長野県■■＝が十八日午後一時ごろ並岳谷を通って飛騨側から吉城郡上宝村中尾部落にたどりついた。■■さんは、きょう五月十日から実兄の■■さん（■）＝■■＝と二人で同小屋を管理するため宿泊中、たまたま十七日は午後十時ごろ携帯ラジオでナイターを聞き終わり、床につこうとしたとたんのできごと。一瞬、耳をうたがうようなものすごいとう音とともに床下が大きくゆれ、そのまま小屋はつぶれた。兄の名前を呼んだが、どこにも見当たらず、ただ夢中で崩壊でつかる火山灰の中を抜け出し、一目散に山を下った。途中大きな落石に出会い、よけようとしたが間に合わず、右足にまともに当たり、一時歩くことができなかったので、岩かげで一時間ほどようすを見て、十八日午前零時ごろ、はいながら山を下り中尾地区にたどり着いた。■■さんは所用発表所で手当てを受けたのち、駆けつけた家人につきそわれて帰宅したが、右足と両手に三カ月の重傷を負っていた。これで気づかわれていた小屋番人は二人とも無事だったわけ。

箱かぶって避難

■■さん（兄）の話

【松本】噴火する焼岳の焼岳小屋から逃げ出し、九死に一生を得た■■さんは収容された西糸屋山荘で「部屋の隅にかぶって無我夢中で逃げた」と感慨のあまりシャベるのもやっとの状態。

■■さんは、きょう五月十日から実兄の■■さんと二人で同小屋を管理するため宿泊中、たまたま十七日は午後十時ごろ携帯ラジオでナイターを聞き終わり、床につこうとしたとたんのできごと。一瞬、耳をうたがうようなものすごいとう音とともに床下が大きくゆれ、そのまま小屋はつぶれた。兄の名前を呼んだが、どこにも見当たらず、ただ夢中で崩壊でつかる火山灰の中を抜け出し、一目散に山を下った。途中大きな落石に出会い、よけようとしたが間に合わず、右足にまともに当たり、一時歩くことができなかったので、岩かげで一時間ほどようすを見て、十八日午前零時ごろ、はいながら山を下り中尾地区にたどり着いた。■■さんは所用発表所で手当てを受けたのち、駆けつけた家人につきそわれて帰宅したが、右足と両手に三カ月の重傷を負っていた。これで気づかわれていた小屋番人は二人とも無事だったわけ。

■■さんは、きょう五月十日から実兄の■■さんと二人で同小屋を管理するため宿泊中、たまたま十七日は午後十時ごろ携帯ラジオでナイターを聞き終わり、床につこうとしたとたんのできごと。一瞬、耳をうたがうようなものすごいとう音とともに床下が大きくゆれ、そのまま小屋はつぶれた。兄の名前を呼んだが、どこにも見当たらず、ただ夢中で崩壊でつかる火山灰の中を抜け出し、一目散に山を下った。途中大きな落石に出会い、よけようとしたが間に合わず、右足にまともに当たり、一時歩くことができなかったので、岩かげで一時間ほどようすを見て、十八日午前零時ごろ、はいながら山を下り中尾地区にたどり着いた。■■さんは所用発表所で手当てを受けたのち、駆けつけた家人につきそわれて帰宅したが、右足と両手に三カ月の重傷を負っていた。これで気づかわれていた小屋番人は二人とも無事だったわけ。

【飛騨】十八日午後四時ごろ、平湯に降る一時的なしゅう雨があった。岐阜、長野県境妙高高原、乗鞍山ろく平湯温泉あたりでは震度約二のひょうが降った。このため吉城郡上宝村の平湯小中校の窓ガラス数枚が割れた。このしゅう雨と焼岳の爆発とは関係があるかどうかはハッキリしていない。

なってない火山防災体制

『危険外』だった焼岳

危険指定　"客が減る"と地元は非協力

北アルプス焼岳が十日夜二度に わたって大噴火、地元の上高地一帯に噴石や灰を降らせた。幸い登山客の姿はなかったが、近年の登山、観光ブームからいって、阿蘇、霧島などでこんどのような規模の爆発が起これば、多数の観光客が死傷するおそれもあるという。これにたいし気象庁の観測陣は、ほとんど無防備状態というのが現状だ。

同庁地震課の調べでは、現在爆発のおそれのある火山は全国で約六十にのぼっているが、このうち阿蘇、桜島など十三の火山はとくに噴火の危険度が高く、大きな被害を出すおそれがあるとして三十一年に危険指定し、常時観測の体制がしかれている。しかし年間の予算はわずか百五十万円で、焼岳、阿蘇、三原山、浅間山の四火山ではどうにか常時観測を続けているものの、残りの焼山、雲仙、霧島、三宅島、桜島、北海道駒ケ岳、草津白根、十勝、雌阿寒、有珠（うす）山の九火山では指定とは名ばかり、その半数以上が地元の鉱山会社に観測を委託しているのが実情だ。それもここ数年の不景気で鉱山する会社が続出、事実上観測を打ち切らざるを得ないという傍観になっている。したがって危険指定も受けていない焼岳の噴火は、同課員でも「青天のへキレキ」と目ちょうしているありさまだ。

また霧島は三十三年の爆発後やっと指定なみの扱いを受けるようになったが、このほか同課では危険がじゅうぶん予測されるものとして鶴見、雲仙、白根、岩手などをあげている。焼岳も裏庭寄の山となっていたが、現在では松本測候所の昼上からはるかに眺望をながめるだけとあって、手の打ちようがなかったという。

また北海道の十勝岳でも六月には いって「地震が毎月十回ていど起こり、新しい噴気口ができ、温度が五一七〇度上昇、ガスの濃度が高まった」と地元鉱山会社の委託観測員からの報告がきているが、これだけのデータでは判断にくく、いまのところ目前の観測の計画もない。一方、火山は観光地として地元では盛んに懸命だが、危険火山の指定を受けると客が減ると地元からの協力をほとんど期待できないという。

また気象庁自体も地震課の定員のワクはわずか全国で十人しかなく、同課では「現在の気象庁の観測網ではどうにもならない。大学や研究所も各地で観測をやっているが、とかく研究のための研究になってしまうので、気象庁としては、防災を第一の目的とした全国的な観測体制の強化を要請している。このままでは不安でたまらない」と語っている。

一家総がかりで避難準備をする吉城郡上宝村中尾部落の人たち

噴煙見上げ一喜一憂

上宝村中尾　万一に備え避難準備

【神岡】十七日午後九時五十分ごろ、北アルプス焼岳の爆発で吉城郡上宝村中尾部落十七戸、約百人の住民は四十七年前、大正四年六月六日の大爆発の惨状を知っているだけに戦りつの一夜を明かして十八日早朝から万一に備え避難準備にかかり、無気味な地鳴りの連続で白煙を吹き上げる焼岳の形相に恐怖の表なきしを送っている。以下恐怖の部落、中尾の現地ルポ。（中尾で小島記者）

一家の生計をたてるにはどうしても必要だという牛を小屋から追い出し、手入れするやら、荷車用のクラをつける用意をしたり、家財道具をかたづけるなどしていた。

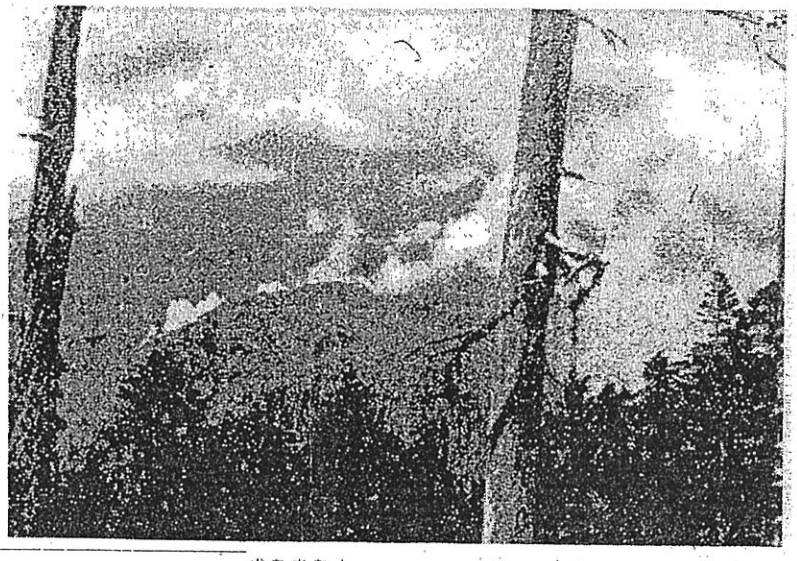
朝尾小中校に通う十六人の学童たちも下校と同時に一家総出でその準備におわれていた。それでもやはり先祖伝来の田んぼだけに手放したくないと田植をしたばかりの稲の世話を忘れず、田んぼの見回りをしている老人も見受けられた。とにかく地元は焼岳の機相の変わるたびに驚かされどうしだ。噴煙の機相も時間とともに間断なく変化、午前十一時ごろ白煙から爆発当時の黒煙に変わり、前いき多く黒くなったかと思うと午後になりやや下火のようす。そのたびに部落民は一喜一憂している。だが夕刻からは厚い雲と強いガスに包まれ全く見えない。このため部落民の表情も不安とも安心ともつかない複雑な表情だ。

一方、あの焼岳の爆発が原因して、てか焼岳麓で中尾開発組合がボーリングしている風景が無謀を地上にも吹き上げ、地元官民をびっくりさせている。なお神岡署では牛丸署長ら十人が現地のもようを視察するためジープで中尾部落へ駆けつけている。

岐阜日日新聞　昭和３７年６月１９日付掲載（現岐阜新聞）

昭和37年6月19日　火曜日

岐阜日日新聞（夕刊）



衰えながらも無気味な噴煙を上げる焼岳
＝猫岳のふもとから

噴煙やや衰える

焼岳　地元民ホッと一息

【神岡・猪谷】十七日夜、燃えだした北ア焼岳（二、四五八メ）は、十九日になってやや噴煙が衰えた。しかし断続的な小爆発が続き近くの住民は緊張を続けている。岐阜県側の山頂下二千数百所から噴出していた噴気口の前側数個の噴煙が十九日早朝まで、全体に噴煙の量が減っている。噴煙は十九日午前十時現在、晴れ上がった上空約三百メートルまで上がり、相変わらずの西風で長野県上高地側へ流されている。断続的に起こる爆発のため白い噴煙と火山灰はなおも周辺の山を包んでいる。

雨降れば火山灰流出

【神岡】焼岳麓の神岡都上宮村で十八日午後十時から約一時間にわたって西麓にある足洗谷に豪雨水が出て、七般、火山灰を流しえたかなりの流灰が川底を洗った。幸いこの谷は深いため部落への影響はなかった。これは噴出によって積もった火山灰が規模を増え、一時せき止められていた水が急に流れ出たもの。

しかし住民たちは「足洗谷にこの水が流れ込んだからよかった」が、これが部落へ流れ出たらどうなったかと、なおも緊張を続けている。同岳の噴出場所から神岡側中腹にかけては火山灰が約六十～七十メートル一面に積もっており、これがこんどの雨によってどっと流れ出したら、中尾部落と下流の雪倉谷、浦田温泉、坂巻部落が全滅するおそれもあるので、住民は再び避難準備をし、地元神岡署、消防署でも非常体勢をとっている。

岐阜日日新聞　昭和３７年６月１９日付掲載（現岐阜新聞）

岐阜日日新聞　昭和37年6月20日　水曜日

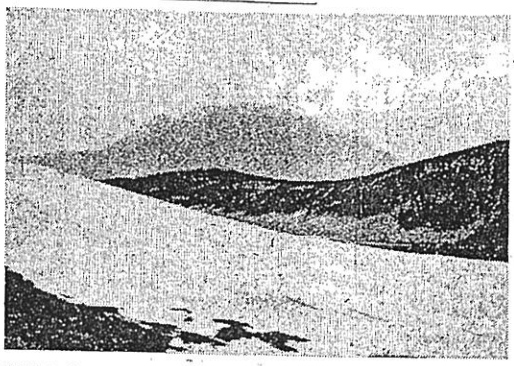
駄々っ子焼岳

乗鞍岳から見る再度の爆発

モクモクと噴煙

視界ゼロ　灰色の目かくし

【飛騨】長野県北部で爆発した焼岳（二、四五八メートル）は再び午後二時九分と同四時十八分と同四時二十分の三回爆発した。噴煙は、それぞれ三回続き、高山市でも"ドシン"という地響きが感じられた。噴火のもようを調べるため記者は乗鞍、焼岳の大阪気村といわれる乗鞍岳の山頂に登り、感れる噴煙の色、を選んだ。

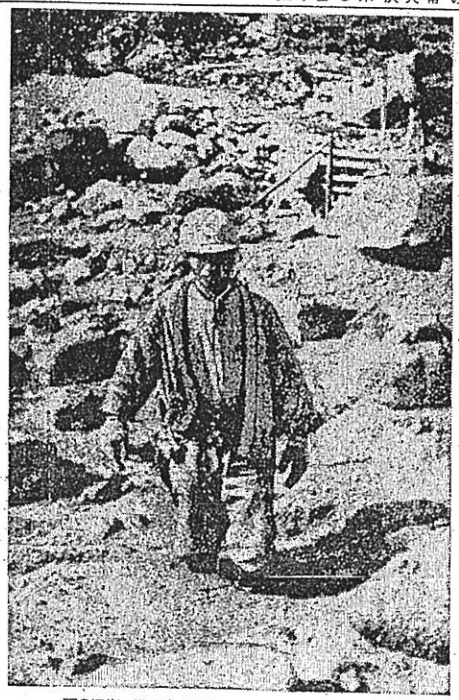


この日は前日に比べガスが多く、大野郡丹生川村からでは焼岳は望見できなかった。平湯峠（一、六八四メ）頂上へさしかかって眼山にかくれていた焼岳がガスのあい間にすこい迫力で浅野にとびこんできた。かなりの量の乳白色の噴煙が上空へ吹き上げている。

あいかわらず吉城郡上宝村の中尾部落側の全噴気口から吹き上げる噴煙が一度約三百メートル上空まで吹き上げられ、すぐに西風に流されて長野県上高地側へなびいている。峠頂上から梁瀬橋の登山バス道路にそって亜高山帯にはいる。大正四年同じ爆発大爆発のとき、降りかかる火山灰のため枯れてしまった枯れ木の間から目前に見えがくれする焼岳を見た。文字どおりの焼岳なおも噴煙を上げ続ける焼岳＝乗鞍山頂鶴ケ池から。手前鶴ケ池、向こうは雪渓

だ。草木のない荒涼たるドーム型の山容がいつになく大きく見える。バックにひかえる槍、穂高連峰の岩はだにきざむシマ模様の線溝が噴煙のため見えかくれする。吹き上げる噴煙の音が部屋まで聞こえるよう。

森林帯を抜けて槍沢ケ原につく。このあたりはすでに焼岳山頂と同じ高さだ。真横に見る怒れる焼岳の山頂は狂う地獄の悪魔をかいま見るようで無気味だ。吹き上げる火山灰と噴煙は長野県側へ流れて



一面の泥海、ひざまで埋まる焼岳の噴出物＝上宝村中尾で

小爆発続く

【松本】十九日夕方の野辺山観測所からの報告によると、焼岳は同日午後二時九分、同二時十八分、同四時二十分の三回にわたって爆発、約四百メートの噴煙を吹きあげ、なお活動を続けている。二度目の爆発は相当大きな爆発音があったが降灰はなかった。岐阜県高山測候所と松本測候所上高地観測所でもやはり三回にわたって活動を観察した。

深さ一メートルもの泥流

中尾部落

【神岡】北アルプスの噴煙は十九日朝になってやや衰えたが、同日午後、二度にわたって中爆発をしいぜん活動を続けている。ガスが出て吉城郡上宝村中尾部落からは噴煙の状況はよく見えない。

中尾部落上流の足洗谷には同日朝までに火山灰など噴出物が降いねん土状となって流れ出した。ガスの合い間から見ると山頂の火口から流出した噴出物が何本かの筋を作っている。この

泥流は先に完成した中尾部落から約二キロ上流の猪谷砂防堰堤（神通川水系砂防工事事務所の足洗谷砂防ダムを兼ねてすり落ち、ダムのすく下にある木橋（長さ十六メ、幅三メ）をこわした。泥はこの橋から約二十メートル下まで押し出されている。一

灰色のねん土状のもので、深いところは一メ以上もっている。山頂にはもっと深もっており、雨が降ると、これがどっと流れ出し、中尾部落はもちろん下流の宝瀬集落などの家屋、田畑が全部流失するおそれがあるので、地元では非常体制をとっている。足洗谷から流れ出る水はどす黒い流れ、下流の神岡町地内の高原川でも濁っている。高山砂防事務所では二十日ごろからまた雨が降り出すもようで、というているので、そのとうが心配される。神岡署などでは、万一の場合に備えるよう住民に伝達している。また同署は焼岳への登山を禁止、飛騨警察署を通じて全員の各警察署へ通達した。

が頂上で噴煙をつづけている焼岳の麓の前堂部長、明神長、湯沢岳、穂沢岳、さらに長野県安曇村、松本市方面までが灰色に覆っている。隠れていれば槍ケ原から見えるはずの上高地帯国ホテルの赤い屋根も火山灰をかぶったのか自につかない。松本市の家なども灰色の膜にさえぎられている。

焼岳は長野県火山帯にある北アルプスの活火山。その噴煙で遭難者を休んでいる親子連の乗鞍岳がばっとように焼岳からときどき噴煙のかたまりがはい登の上を逃げるようにとぶ。同時に鳴をつく音響がスの臭い

あの噴煙の下で二人の■■さんが火山ガスと降灰を頭から浴びなが

ら発に浴びのびたという山男のたのもしさもすぐ隣の乗鞍山頂から見おろしてみて印象が強くなろうというものだ。

岐阜日日新聞　昭和３７年６月２０日付掲載（現岐阜新聞）

岐阜日日新聞（夕刊）　昭和37年6月20日　水曜日

泥流におののく

焼岳飛騨側の中尾部落

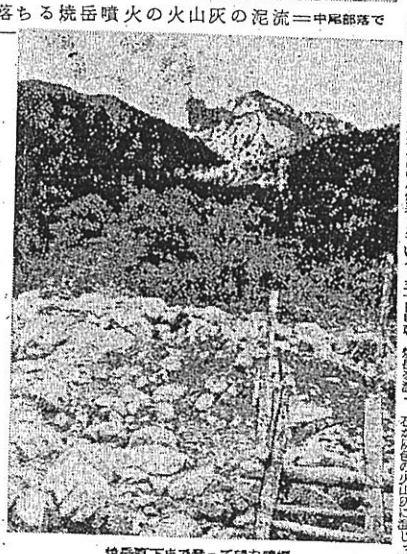
雨が来たら一ナメ

噴煙いくぶん衰える

【飛騨】北アルプス焼岳の噴煙は十九日新しく発生した噴火口も含めていくぶん衰えた。しかし、ほっと胸をなでおろした焼岳飛騨側の住民は、雨が来たらどうなるかと、火山灰の堆積による泥流の発生に不安をつのらせている。

【神岡】再び爆発した焼岳は、きょう十七日の大爆発以来二回の小爆発で怒りの形相は、その後じさを加えている。十七日昼頃、焼岳を源

流れ落ちる焼岳噴火の火山灰の泥流＝中尾部落で



焼岳真下まで登って望む噴煙

一面に火山灰と岩石

焼岳ま下の足洗谷一帯

噴出した火山灰が一万数千立方メートルにもなるとみられる焼岳飛騨側の中尾部落は、一面に火山灰と岩石が埋まってしまった。

中尾部落に面した頂上の方、西側一カ所に大きな口をあけた火口からマワタを思わせるような白煙が約百メートルの上空に立ち登り、相変わらず長野県上高地側に流れている。十九日午後の足洗谷までの冒険をさらに押し進め、同谷最上流の焼岳の真下まで登山した。あたり一面は爆発と同時に吹き飛ばされた直径三―四メートルの岩石と火口から間断なく吹き出す火山灰、夏ミカンを思わすようなゆみがらけの岩石が灰色の火山灰に混じって谷に、吉城郡と吉村中尾に流れる足洗谷の最上流まで登り、その様相をながめてみた。

中尾部落に面した頂上の方、西側一カ所に大きな口をあけた火口からマワタを思わせるような白煙が約百メートルの上空に立ち登り、相変わらず長野県上高地側に流れている。十九日午後の足洗谷までの冒険をさらに押し進め、同谷最上流の焼岳の真下まで登山した。あたり一面は爆発と同時に吹き飛ばされた直径三―四メートルの岩石と火口から間断なく吹き出す火山灰、夏ミカンを思わすようなゆみがらけの岩石が灰色の火山灰に混じって谷一面に押し流されている。この火山灰の上をいく筋にもわたり前日に降ぎながら谷間にそそぐ水はきのうの黒味もややさめて灰色に変わっている。曲がりくねった登山道も途中、火山灰や大小の岩石にさえぎられ、あとかたもない。青々とした野草も無惨に焼けただれ、生気をみなぎらせていた様のどれも灰色に塗りつぶされて、死の山、を思わせて痛々しい感じ。

まう恐れがある。さらに下流の雪崩見、神田川沿いの神岡温泉など旅館街も危い。このあたりは川幅が広いが川底が高いので泥流はどこをねらうかわからない、神岡地内に神坂ぞん堤がある。神岡測候所では二十四日のうちからまた雨模様になる。雨が降ると火山灰は谷川の水とは関係ない流路を作りながら下流へ押し出される。中尾部落一千一百の家屋と田畑が埋まってしまう恐れがある。さらに下流の雪崩見、神田川沿いの神岡温泉など旅館街も危い。このあたりは川幅が広いが川底が高いので泥流はどこをねらうかわからない、神坂地内に神坂ぞん堤がある。

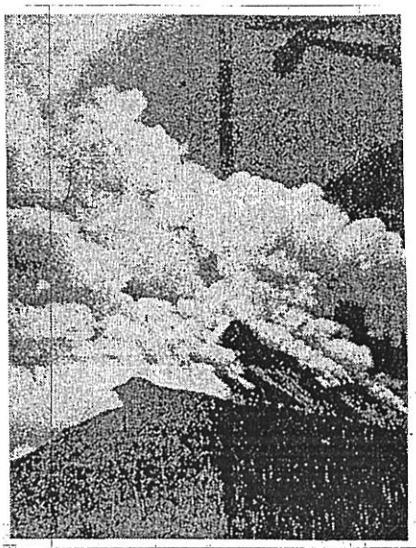
神岡町と高井土木出張所は十九日午後、焼岳飛騨側の住民に新たな災害が降り打ちをかけている

北飛遭難救助隊

怒る焼岳を現地調査

うなり立てる火口

火山弾跡ハチの巣状に



【上高地】なおも噴煙を上げ、怒り続ける北アの火口を見きわめようと、吉城郡上宮村神坂、北飛山岳遭難救助隊長、今田勇さんら六人は二十日、現地調査に向かったが、火山灰をかきわけての必死の登坂でまのあたりに噴火口を見てきた今田隊長は次のように語った。

中尾部落から出発したわれわれはいつもと変わらぬ樹林帯を縫っていったが、煙りをあげる焼岳を目の前に見える展望台出たとたん、思わず身ぶるい。をしたが。ちょうど標高まで三千くらいの地点だろうか。新緑の木は火山灰でかっ色のように変わり果てて、直径三十センチ位二メートルもある石が火山灰の泥流に落ち込み、まるでハチの巣を思わせる光景だった。火口付近は長径円形のミゾ。火口の五〇〇近くまではい寄ってみると、ゴウゴウと音が響いてかえる音が聞こえ、亜硫酸ガスで息もつまりそうだった。火口は風下側は中尾部落からみて中央はぽっかりえぐりとられていた。焼岳の小屋の周囲は厚さ二十センチほどの火山灰で一ぱい。付近の登山道もズタズタで当時のすさまじさを物語っていた。

はりきり旅 非売品 @0517

目前に見る焼岳噴火口

焼岳に観測陣

東大震研

【上高地】二十七日の噴火後三日も噴煙を吐き続けている焼岳を観測するため、東大地震研究所の文部技官平賀士郎、鈴木清一、宮崎務の三氏は二十日上高地に到着、村営ホテルを基地に上高地の八カ所に地震計を据え付けた。一行はいまのところ十日間にわたって観測する予定で、二十五日すぎには同研究所火山物理研究室の水上武教授も加わり①噴発はどういう性質のものか②再噴発はあるか③噴煙はいつまで続くかーなどを観測する。

また信州大文理学部地質学教室の小林国夫教授ら三人も、同日上高地に着き調査をはじめた。

大和サロン
☆雨にたたられる演技☆
雨降って地盤固まらぬ
—参院立候補者—
大和証券　提供

岐阜日日新聞　昭和３７年６月２１日付掲載（現岐阜新聞）

おわりに

これらの資料からは、噴火の様子や被害について知ることができました。

焼岳は、中長期的には火山活動が高まってきており、注意が必要な活火山とされています。過去の事例を学びつつ、最新の火山情報にも十分注意し、登山に際しては登山計画書の提出、ヘルメット等の装備をすることが大切です。

※気象庁ホームページ「焼岳の活動状況」
(https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/activity_info/310.html)

焼岳火山防災協議会では昭和 37 年(1962 年)の噴火に関する資料を収集しております。今後も、準備の整った資料から順次公表してまいりますので、情報をお持ちの方は下記連絡先へご連絡ください。

岐阜県飛騨県事務所振興防災課
電話：0577-33-1111（内線 232）
FAX：0577-33-1085

長野県松本地域振興局総務管理課
電話：0263-40-1903
FAX：0263-47-7821

高山市総務部危機管理課
電話：0577-35-3345
FAX：0577-35-3174

松本市危機管理部危機管理課
電話：0263-33-9119
FAX：0263-33-1011

参考文献

・焼岳火山防災協議会「焼岳火山防災避難計画」令和２年２月３日

・及川輝樹・山田久美『日本の火山に登る』（山と渓谷社）2020 年 3 月 15 日